



[エックス]小説版

THE
MOVIE
ANIMATION

渡辺麻実 Mami Watanabe

CLAMP The Original Work

結城信輝 Color Illustration: Nobuteru Yuki

阿部 恒 Monochrome Illustration: Hisashi Abe



—— エックス ——

X

エックス小説版

江苏工业学院图书馆
藏书章

渡辺麻実

Mami Watanabe

CLAMP

The Original Work

ASUKAノベルス

X ーエックスー



著 者 渡辺麻実

発行者 角川歴彦

発行所 株式会社角川書店

〒102 東京都千代田区富士見2-13-3

電話/編集部03-3238-8651 営業部03-3238-8521

振替/00130-9-195208

印 刷 大日本印刷株式会社

製 本 株式会社多摩文庫

初版発行 1997年2月17日

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたします。

©MAMI WATANABE 1996/1996 CLAMP/「X」製作委員会

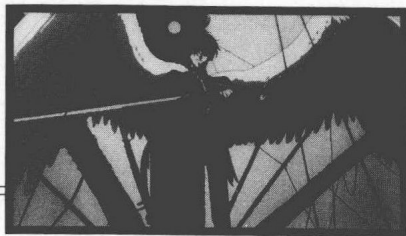
Printed in Japan ISBN4-04-701317-X C0979 A-18

CONTENTS

過去にみた夢...P.3

未来を紡ぐ夢...P.115

過去にみた夢



『始』

最初に『夢』があった。

誰の『夢』かはわからない。

が…『夢』そのものが『夢』をみたいと思う事があるかもしれない。

『夢』が意志を持った時、それは『運命』という大いなる流れにかわるのかもしれない。
その時はいつでも起こり得る。

今日か…明日か…それとも…いますぐか…。

1

そこは常に日本の政治を担う中心であった。時に、喧騒けんそうが起き、時に歴史を変える法律が定められた。いわば国家権力の象徴とも言うべき所……。

目の前に皇居。そして、傍らには最高裁判所。取り囲む様に警視庁、運輸省、建設省、

外務省……等々。

ほぼ日本の中枢を固めたような地域である。

その中心にそれら全てを見据える様に鎮座する国会議事堂。その地下深く、余人の知るところではない場所があつた。

(始まる……!!)

声にならない声が悲鳴をあげた。

平安時代を思わせる、室内の御簾みすの中で一人の少女が飛び起きた。

その瞳は大きく開かれていたものの何も映しはしない。叫んでいるようにみえても声は誰にも聞こえない。

面差しは平安朝貴族の童女の姿であるが、表情に秘められた苦悩はこの世人では想像もつかないほど深い。

(……とうとう神威かむいが……戻ってくる)



少女の声にならない声が部屋中にしみわたった。どこかで、その問いにうなずくような
気配がした。

少女の名は『^{ひのと}丁』。

東京の……いや地球の未来を夢の中で預言する夢見……と、呼ばれる。しかしその存在
を知る者は政治の頂点に立つ者のみ。いや……それだけではない。

政治には全く縁のない、ごく限られた者達にとつて彼女は当然のごとく存在していた。
彼女の存在を『是』と認める者達と……もつと大いなるものにとつて……。

彼等全てが待っている事實は、既に始まっていた。

白昼にポツカリと浮かんだ一塊の暗雲の真下に巨大な高層ビルが林立していた。既に東
京では珍しくない光景だ。

それでも、この辺りはまだこのビルに届くほどの高さを誇る物はない。

ビルの名はサンシャイン60。東京ではかなり早い時期に建てられた高層ビルのひとつで

ある。

建てられた当初は話題となったが、いつの間にやら高層ビルとしては人々の記憶の隅に追いやられ、日常の風景になっていた。

が……今、唯一、信じられない光景があるとしたら、そのビルの屋上……しかも航空灯のともるあたりに二つの人影。

二人ともまだ年は若い。が、修行僧のようないでたちの若者の方が少し若いだろうか。彼の名は皇昴流^{すめらぎすばる}。日本の陰陽師を束ねる『皇一門』の十三代目当主である。

「元氣そうだね……昴流くん……」

「星史郎^{せいしろう}さんも……」

適度な距離を置いて、航空灯の上に浮かぶ様にして立っているのは黒ずくめのコートにスーツ……そしてサングラス。

星史郎と呼ばれた青年は『皇』に対して、同じ陰陽道でも、その力を使って人を殺める一族『桜塚護^{さくらづかもり}』である。

『皇』と『桜塚護』の対立の流れは古く、深い。

その最後の決戦が始まろうとしていた。二人は、これから始まろうとする地球を賭けた



戦い以前に、まず互いの決着をつけることを優先したのだろう。

「本当はもう少し話をしていきたいのだけどね……」

星史郎が微笑む。

「生憎……今の僕はあなたをこの手で殺す事しか考えていない」

呟いた途端、昴流は印を結んだ。

すると、上空からスーッと透き通った幕が下りてくる様にビル群を包み込んだ。

「結界を張りましたね……昴流君」

「よそに迷惑をかけてはいけませんから」

「相変わらず、律儀な事で……」

星史郎が微笑んだことが決戦の始まりだった。

そこ以外はいつもの朝であった。

ここ……刀隠神社でも、それは同じであった。

唯一違う事と言えば……。

カシヤーン……。

風のせいだったのか……あるいはなにがしかの意志が働いたのか……。いつも居間に飾つてある写真たてが床に落ちた。

ガラスの盾を失った一枚の写真が宙を、舞つて落ちた。写真には小学生くらいの男の子が二人と、少し年下らしき少女が夏祭りの出で立ちで写つていた。

「神威……」

ガラスにまみれた写真を大事そうに拾いあげた。彼の名は桃生封真^{もろうふうま}。写真の中の一番年長に見える少年だ。そして、いまはここ……刀隠神社の跡取りとなるであろう青年である。

「お兄ちゃん!」

音に驚いて小鳥^{ことり}が台所からヒョイと首を出した。

封真の妹である。

一瞬気を抜いた封真の指をガラスの破片が軽くなすった。

「やだ! お兄ちゃん! 指! 絆創膏^{ばんそうこう}持つてくから、だめよ。それ以上触っちゃ」

「ああ」

「破片、刺さってないわよね」



「大丈夫だ」

「血は？」

なんという事もない最後の小鳥の言葉に、封真はいささか慌てた様に自分で薄く血がにじんでいる指をくわえた。

「ホラ、指、出して。絆創膏貼^はるから。痛かったら、言ってね。さ、これでいいわ」

「写真が……」

封真は小鳥の手当ての素早さにガラスまみれの写真を拾う事ができないでいた。

「神威ちゃんの写真……」

「これしかないから」

封真は注意深く三人の子供が写っている写真を取り上げた。そしてまだ写真の上に多少残っている小さな破片を払いのけた。

「そうね……」

「もう六年になる……」

「ん。でも大丈夫よ。また三人で撮れるから」

「小鳥……？」

「昨夜ね、夢をみたの」

「え……？」

「いままでは六年前にいなかった頃の……そう……この頃の姿ばかりだったんだけど……昨夜夢でみた神威ちゃんはは小鳥と同じくらい……あれは絶対に神威ちゃんよ。小鳥には分かるの。背も高くなって、ずつと素敵になって……」

そこまで一気に話すと小鳥は頬ほおを赤らめた。

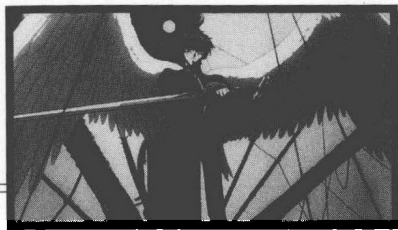
「神威が……」

「うん。神威ちゃんが戻ってくる……小鳥には分かるの」

小鳥は幼い頃の自分達の姿が写っている写真を食いいる様に見つめた。
そして封真も……。

桃生家……。

そこでは二人の兄妹が小さな神社を守っていた。いつの頃からか家事や神社の仕事の分



担が決まり、妹は母屋の家事一般を取りしきり、兄は亡き父に代わって、神社の清掃やら風通しを行っている。神事に関しては、正式に神主となるまで取りしきる事はできない。

近所の人々は無口で少し陰のある封真が神主になるものだと思いついてるらしい。が本人がどう思っているかは定かではない。

けっして無愛想ではないのだが、長くからこの地に住んでいる人々も封真が挨拶以上の長い話をしているのを聞いた例がないからだ。両親が亡くなってから、特にその傾向は強い。

——そんな事ないの。お兄ちゃんはいろんな事お話してくれるわ。言葉にはならないだけなの。

まさに微塵^{かじん}も汚れない微笑みで妹は周囲に説明する。が、それはフォローというには程遠い。むしろ稀有^{けう}に映ってしまうのだが、それ以上普通の人々が詮索^{せんさく}しないのは彼女が幼い頃から体が弱いせいだろう。

人間は体のどこかが健常者より弱いと判断されると、それを補う何かが発達するものだ

と思うらしい。

小鳥の場合もその条件にあてはまる。

せちがらい世の中であつてもそれくらいの優しさはある。

この六年の間……封真・小鳥兄妹はそんな日常の中で育ってきた。

しかし、本当の事は六年前に写真に写っていたもう一人の少年……封真より少し幼く見える少年……神威が、消えた時から始まっていたのかもしれない。

彼がいなかったことが、あるいは唯一の安らぎの時期だったのかもしれない。それが破られつつあるのだ。

砕けて散った写真立てのガラスの様に……何もかも全てが砕け散る時はジリジリと迫っていたのかもしれない。

先程から続いていた高層ビルの戦いは終わりを告げようとしていた。

かつて、そこは巢鴨^{すがも}プリズンのあった所で、昭和の歴史に最大にして最悪の事態を引き